

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K04458

研究課題名（和文）自律的学習に資する履修計画支援プログラムの開発及び効果検証

研究課題名（英文）Development and effectiveness verification of a course planning support program that contributes to self-regulated learning

研究代表者

五島 讓司（GOTOH, George）

新潟大学・教育基盤機構・准教授

研究者番号：90360205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：

本研究では、昨今の大学教育に求められる自律的学習者の育成という課題に対し、従来、工学教育分野に偏る履修計画支援の動向に着目し、汎用性のある履修計画支援プログラムの開発と効果検証を行った。プログラムの開発にあたり、履修支援に関わる現状や課題を調査し、学生の履修（学習）支援に関わるニーズや課題を明らかにするとともに、段階的な履修支援プログラムの構想を立案した。学習目標を設定し履修計画を立て自己調整していくような履修計画支援システムのプロトタイプを開発するとともに、プログラム参加者は、履修を振り返る活動を通じて内発的動機づけが強化され、自己調整学習方略が有効に機能していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学生を対象にした自己調整学習理論に基づく研究においては、従来は個々の授業科目や特定の分野（工学、語学等）での実践研究が多くみられるが、本研究は、大学の4年間全体を見据え、履修（学習）計画作成を支援する観点から、学生の多様な学習履歴や興味関心に基づく、個別最適化された学びやキャリア計画づくりの支援の一つのモデルを提示した。本研究で開発した支援プログラムは履修選択やキャリア選択の幅が広い分野の学生の学習に資することを意図していることから、他大学でも実情に応じて実施が可能な他、社会人のリスキリングに関して、多様なニーズに即した学びを促進するサポートプログラムとしても展開できる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we focused on the trend of course planning support, which has been conducted mostly in the field of engineering education, and developed a versatile course planning support program and verified its effectiveness in relation to the issue of developing autonomous learners required for recent university education.

In developing the program, we surveyed the current status and issues related to course support, clarified the needs and issues related to course (learning) support for students, and proposed a plan for a step-by-step course support program. We developed a prototype of a course planning support system that enables students to set learning goals, make a course plan, and self-regulate their course planning. We also found that participants in the program strengthened their intrinsic motivation through activities to reflect on their coursework, and that the self-regulated learning strategy functioned effectively.

研究分野：教育学、科学教育

キーワード：自律的学習 自己調整学習 内発的動機づけ 履修計画 履修支援

1. 研究開始当初の背景

(1) 全体の背景

昨今の我が国の高等教育では、ユニバーサル段階への移行に伴う学生の多様化に対して学士課程教育での質の保証が一層求められ、現代生涯学習社会で求められる自律的学習者の育成をめざし、学習支援の在り方が検討されるようになってきている。

学習に関する理論的研究においては、自律的学習や自己調整学習、学習方略といったテーマの研究が脚光を浴び、研究成果が蓄積されてきている。大学生の学習については「内発的動機づけ（自分の興味によって学習内容を深く理解し身に付けようとする意識）の高い学習者ほど、全ての自己調整学習方略をよく使用すること」が指摘されている（藤田他 2012 年）。

すなわち、自律的に学習に取り組めるかは動機づけ段階が左右するということであり、**自律的学習の重要な第一歩が履修計画立案**であると捉え、履修計画支援の在り方をさらに見直し、学生の自律的学習に資するようにすることも必要ではないかと考えられた。

(2) 学術的な背景

学生が履修計画作りを通して高い内発的動機づけを有するためには、学生自身の興味関心に基づいて適切に履修計画ができることが鍵となる。この課題は、2000 年代から工学教育や情報工学、教育工学、教育システム学分野で取り組まれた「単純な検索を備えた電子シラバス」（森 2005 年）を進化させてきた。

履修計画支援の目的は、学生側の要望や問題に注目し、「学生を適切な履修行動に導くこと」（東京農工大学 2002 年、京都大学 2006 年、香川大学 2007 年等）、人材育成モデルやディプロマポリシーへの理解をさせること（広島経済大学 2014 年、立命館大学 2015 年等）として、システム開発や上級生による履修相談の工夫がなされるようになった。東京大学の「授業カタログ」や芝浦工業大学の「学生のセルフオリエンテーションシステム」は、学生に自分の知的関心に基づいた履修計画づくりに取り組んでもらうことを意図し、カリキュラム全体像の可視化や構造化アプリ（MIMA サーチ）を履修計画支援システムにリンクさせている（星野他 2012 年）。近年の教育現場において、従来の履修の手引きに加え、例えば、上級生による履修相談（新潟大学等）、「タフな東大生」育成をねらいとしたシラバス検索システムや、先述の「授業カタログ」が開発されているのは、学習の動機づけに重要な履修計画段階に対して注意が払われるようになってきたことを示している。

ここで、学生側に目を向けたこれらの履修計画支援の動向に注目すると、学生を自律的学習に導くためには、「学生のキャリアプランに合わせた目標設定」を行い、学生自身の関心に基づき設定した「目標に対する講義の組み立てを効率よく行うことが出来る」（美馬 2014 年）履修計画支援システムの開発と支援プログラムの開発が重要ではないかと考えられる。そのため、自律的学習者の育成を中核的な目標とした先進的な履修計画支援システムの開発と指導プログラムの開発、及びその成果の検証が必要であることから、コンピテンス指向の高等教育をめざす海外の先行的な事例（TUM、学生支援団体）や「知識空間概念に基づく情報技術人材育成のための履修支援システムの提案」（董 2013 年）等も視野に入れて検討に着手することとした。

<文献>

- ・藤田正他 2012 「自己調整学習に及ぼす学習動機及び学習方略についての認知の影響」 奈良教育大学『教育実践開発研究センター研究紀要』第 21 号 pp. 81-87.
- ・森幹彦 2006 「大学教養教育における科目選択支援」 MYCOM2006 第 6 回 AI 若手の集い MYCOM2006 (Meeting for Youth Community 2006) 人工知能学会主催
- ・美馬秀樹 2014 「工学教育の構造化・可視化と質保証」 深堀聡子『AHELO 調査結果の分析に関する研究会 研究成果報告書』 pp. 69-82.
- ・星野励他 2012 「学生のセルフオリエンテーションシステムの構築」 日本工学教育協会 平成 24 年度『工学教育研究講演会論文集』第 60 号 pp. 620-621.
- ・董又碩 2013 「知識空間概念に基づく情報技術人材育成のための履修支援システムの提案」 研究・技術計画学会 『研究技術計画』第 28 巻 第 3/4 号 pp. 323-332.

2. 研究の目的

本研究は、大学教育に求められる自律的学習者の育成を主眼として、工学教育分野に偏る履修計画支援の方略に関わる成果を参考にしつつ、**汎用性のある履修計画支援プログラムの開発と効果検証**を目的とした。学生が自分のキャリアプランと大学カリキュラムの構造をすり合わせながら、学習目標を設定し履修計画を立て自己調整するように、履修計画支援システムをプロトタイプに開発し、適切で効率の良い支援プログラムを提供することをめざした。

3. 研究の方法

自律的学習に資する履修支援プログラムの開発及び効果検証という本研究の目的を達成するため、履修支援プログラムの試行・検証、学生の履修行動の追跡調査を行った。具体的には、**(1) コンピテンス・ベースの自律的な学習に関わる理論的検討**（先行研究の文献調査、先行的な取り組み事例の比較等）、**(2) 履修支援ツールの開発・試行**（テキストマイニング等の情報技術を活用したカリキュラム情報検索システムの構築・改善、質問紙調査）、**(3) 履修支援に関わるプログラムの開発・実施・検証**（アンケート調査）の3つの柱を立て、これらを並行的かつ連動して研究を進めた。

(1) 自律的な学習に関わる理論的検討

① 履修支援に関する教授学的検討

履修支援の方略や履修支援ツール開発における理念的な枠組みを整備するため、自律的学習に資するコンピテンス等について、先行研究を参考にして概念を整理した。また、カリキュラムの体系化や可視化に関わる他大学の現状と課題について、文献調査により比較・分類を行った。併せて、履修支援プログラムの開発・実施におけるシラバスの活用状況についてレビューした。

② 履修支援に関わる教育システムの調査

本研究における履修支援ツール開発の参考にするため、履修支援ツールを学生の学習指導やサポートに活用している芝浦工業大学を訪問し、取り組みの詳細や課題等を調査した。

(2) 履修支援ツールの開発・試行

① 学生の履修登録に関する予備調査

シラバスの記述項目の改善、履修支援システムの設計・開発のための基礎データ収集を目的として、新潟大学、東京大学、芝浦工業大学の在籍学生を対象とした質問紙調査を実施した（回答者内訳：新潟大学 695名、東京大学 133名、芝浦工業大学 84名）。

② 履修支援ツールの仕様策定・開発

自然言語処理技術や知識抽出技術を活用した検索システム（MIMA サーチ）に新潟大学のシラバスデータを投入した評価サイト（プロトタイプ版）を構築し、研究代表者や分担者・協力者の所属大学の学生等に履修計画作成時における有効性や使い勝手等についてヒアリングを行った。ヒアリングの結果を仕様検討にフィードバックして仕様を確定し、履修支援ツールを開発した。

(3) 履修計画支援に関わるプログラムの開発・実施・検証

① 履修支援プログラムの検討

上記(1)の理論的検討や、(2)の学生の履修登録に関する調査や検索システムの評価サイトのヒアリング等を踏まえ、履修支援ツールを活用したプログラムの構想を検討した。

② 履修支援プログラムの試行による検証及び成果発表

主専攻プログラム（新潟大学経済学系）において履修支援プログラム（履修支援ツールの活用を含む）を計3回試行し、同プログラムの参加学生を対象にアンケート調査を行った。併せて、比較検討のため、同プログラムに参加していない学生にも同様のアンケートを実施し、教育上の効果等について検証した。

これまでの各種調査結果を踏まえ、大学教育学会や大学教育研究フォーラム等の、高等教育の関係者が集まる学会等にて成果を発表し、本研究を総括した。

4. 研究成果

(1) 履修登録に関する現状調査

この調査は、予備調査と本調査の2段階で実施した。予備調査では、新潟大学の履修アドバイザーの経験者13名（学部生9名、大学院生2名、OB2名）を対象に、それまで新入生にアドバイスしてきた経験や自身の履修科目の選択状況を振り返ってもらった。具体的には、学生は自身の興味や将来の進路についてどの程度意識しているのか、既存の履修支援は学生にとってどの程度参考になっているのか、他にはどのような情報があるとよいのか等について、2016年7月から8月にかけて面談を行った。

予備調査の結果を踏まえ、アンケートの項目や回答形式を精査し、履修登録の際に一番困ったことや、どのような情報があったらよいのかをより簡潔に尋ねる形に改めた上で、主に学部1年次生を対象に、本調査を実施した。本調査は、新潟大学ではすべての学部の1年次生をなるべく網羅できるように、2016年11月から12月にかけて8つの授業で実施し、計695名から回答を得た。加えて、比較検討のため、学生に自分の知的関心に基づいた履修計画づくりに取り組んでもらうことを意図して、カリキュラムの全体像を可視化・構造化するアプリを構築して履修計画支援システムに接続させている東京大学や芝浦工業大学でも同様の調査を実施した。

結果、3大学に共通していえるのは、入学後から履修登録までで一番困ったことは、履修登録に必要な情報が不足していて、どのように履修登録すればよいか分からなかったことであり、履修科目の選択時に重視することは、授業内容、単位の取りやすさや、進級・卒業要件を挙げる者が多かったことである。また、履修科目の選択時にあったらよいと思う情報として、前年度の成績評価、履修登録の抽選倍率、先輩の経験談が、あったらよい支援として、学部学科の先輩のアド

バイス、履修計画のサポート（前期・後期）が多く挙げられた。どのような評価が行われるのか、自分が履修できるかどうかは確かめるが、当該の科目を履修することによってどのような力を身に付けることが期待できるか、授業の具体的な内容についてはあまり関心が払われていない。そのため、目標達成型の学習計画が立案できているとはいえ、高校までの受動的な学習意識から抜け出せないまま、自律的で主体的な学びへの転換ができないまま履修科目を選択している実態が明らかになった。

また、3大学の回答者のうち1・2年生のみを抽出し、将来展望と大学での学習や、履修科目選択で重視する点と欲しい情報・サポートについて分析した。結果、3大学に共通していたことは、将来展望を持たない学生は学習意欲が低く、その傾向は学年が上がるほど強化される可能性（将来展望を持つことの重要性）があること、そして、将来の自身の姿（キャリア）をイメージして大学の学習を位置付けられるようにするための履修のサポート（キャリア教育との連携も含む）や授業科目間の関係を中心にした教育課程の構造に関する情報提供（将来とのつながりと授業科目間の関係）が求められていることであった。

(2) 履修計画支援プログラムの開発及び試行実施

履修計画支援プログラムは、学生が自らの学習について自律的になることの重要性や自律的学習のサイクル（ジーマンら）について知るとともに、それまでの学習を振り返った上で今後の学習計画や方略を（再）検討することを目的として、新潟大学経済学部2年生（当時）のゼミ（演習）の学生を対象に実施した。同プログラムの実施時期及び主な内容は表1のとおりである。

表1 履修計画支援プログラムの内容

回数	実施年月	実施内容	中心となる学習サイクル
第1回	2018年12月 (2019年1月)	・これまでの履修の振り返り ・経済学部専門科目の構造的把握をふまえた履修の計画立案	自己省察→計画
第2回	2019年6月	・「地域活性化」問題への取り組み方の考察 ・課題への取り組み方に関する学習の型（学習方略）による省察	計画→遂行/意思的制御
第3回	2020年1月	・これまでの学修・経験を振り返り、卒業後の進路の計画立案 ・卒業後の進路を材料にした自身の学習サイクルの省察	遂行/意思的制御 →自己省察（→計画）

(3) 履修計画支援プログラムの効果検証

各回のプログラムに参加した学生（処置群53名）と、参加していない学生（対象群51名）に対して、「大学での学習についてのアンケート調査」（以下、アンケート調査）を行った。処置群の学生には、プログラムの最初にアンケート調査に回答してもらった。アンケート調査の回答者の構成は表2のとおりである。なお、合計は、対象群、処置群、どちらの群も、途中参加、途中欠席を含めた延べ数である。

表2 アンケート調査の回答者の構成

	プログラム 参加学生 (処置群)	プログラム 不参加学生 (対象群)	合計
1回目から参加	46	49	95
全ての回到答	19	32	51
途中脱落	26	15	41
2回目のみ脱落	1	2	3
2回目以降から参加	7	2	9
合計	53	51	104

アンケート調査は、学生自身の普段の学習行動や学業成績（自己申告）、履修科目を選択する動機、履修科目選択に際して参考にする情報等についての項目から成る。このうち、学習行動については、ジーマンらの自律的学習のサイクルに対応して、学習計画（目標設定、方略プランニング、自己効力信念、目標志向性、内発的興味）、遂行/意思的制御（注意の集中、自己指導/イメージ、自己モニタリング）、自己内省（自己評価、帰属、自己反応、適応性）に関わる項目を計30項目作成し、それぞれについて、「5. とてもあてはまる」、「4. ややあてはまる」、「3. どちらともいえない」、「2. あまりあてはまらない」、「1. まったくあてはまらない」の選択肢の中から一つ選んでもらった。履修科目を選択する動機や履修科目選択に際して参考にする情報等については、該当するものを3つまで選んでもらうようにした。

表3 学習動機と学習方略に関する認知の変化

	時点2		時点3			時点2		時点3	
	全体	処置群	全体	処置群		全体	処置群	全体	処置群
1 内容が面白かったり、知りたかったりするから学習する		+		+	17 テストの準備をするときは、講義や教科書の内容をまとめる				
2 知識や能力が身につくから学習する					18 苦手な授業であっても良い成績を得ようと努力する				
3 自分が学習したいと思うから学習する					19 学習するときは自分が既に知っているものや他の様々なものと結びつけながら考える				
4 学習することはきまりのようなものだから学習する	-				20 学習中は、重要な部分は自分の言葉に置き換えて考える	+		+	
5 課題などのやらなければいけないことか与えられるから学習する					21 学習を始めたら、当初のやり方を変えない				
6 今の社会では学習しなければならぬから学習する					22 学習していると、よく気が散る	-		-	
7 将来いろいろなことに役立つから学習する					23 学習の努力を自分で評価するようにしている				+
8 自分の能力を高めることになるから学習する					24 学習の結果は、以前の自分とよく比べる				
9 学習すること自体が大切だから学習する					25 学習の成果は、他の人と比べることが多い				
10 しておかないと不安だから学習する					26 結果が良くない場合、学習方法や練習内容などを見直す				
11 周りからやれといわれるから学習する					27 結果が良くない場合、自分の能力が足りないのではと思う				
12 周りの人を悲しませたくないから学習する				+	28 課題や問題の場面によって、学習の方法は変わってくると思う				
13 学習しておかないと恥ずかしいから学習する					29 物事に習熟するためには繰り返し学習することも大切だ				
14 どれくらい学習するか考えてから取り組む					30 将来のイメージが明確にある				
15 自分のできる範囲を考えながら学習する	+			+					
16 学習のやり方が自分に合っているかどうかを考えながら学習する	+	-		+					

先述したように、1回目のプログラムでは学習動機、2回目のプログラムでは学習方略が主な内容であったため、学習動機と学習方略における認知度合いに関して、プログラムの受講の有無による影響を統計的に分析した結果、表3のとおりとなった。以下に、主に明らかになった傾向を挙げる（「増加」「減少」に関わる有意水準は5%とした）。

- ・「1 内容が面白かったり、知りたかったりするから学習する」傾向が処置群で増加（2回目受講時、3回目受講時）
- ・「15 自分のできる範囲を考えながら学習する」、「20 学習中は、重要な部分は自分の言葉で置き換えて考える」傾向は全体的に増加（処置群と対照群で違いなし）
- ・「16 学習のやり方が自分に合っているかどうかを考えながら学習する」傾向は、2回目の受講時には対照群のみ増加し、3回目の受講時には全体的に増加
- ・「22 学習していると、よく気が散る」傾向は全体的に減少（処置群と対照群で違いなし）
- ・「23 学習の努力を自分で評価するようにしている」傾向は処置群で増加（3回目受講時）

以上をまとめると、履修計画支援プログラムを受講した学生は、学習の動機として、授業や学習の内容に対する興味関心が増し、自分が学習で取り組んだことを自ら振り返るようになってきている傾向にある。一方で、自分のできる範囲や、学習方略が自分に適しているかどうか考えつつ、自分なりに学習していくことについては、大学での日々の学習を通して自然に身に付けている可能性が窺える。このように、プログラムの参加者や非参加者を対象にした経年の（比較）調査の結果、**プログラムを通して、履修を振り返る活動により内発的動機づけが強化され、自己調整学習方略が有効に機能した可能性**が明らかになった。

学習における内発的動機づけの高まりや、自らの学習を振り返ろうとする姿勢は、以後の学生自身の学習に主体的・自律的に取り組んでいくようになるだけでなく、大学卒業後の社会生活においても、自律的学習者として、自身の成長や自己実現を図っていくためにも重要であり、プログラムを通して学習に対する意識が一定程度変化した可能性が考えられる。

今後は、3回目のプログラムを受講後の変化を調べるためのアンケート調査やヒアリングの追加実施、学業成績や履修登録時に重視する情報等との関係、学生の専攻分野やキャリア選択による傾向の違い、詳細な学習履歴との関係等を検証するだけでなく、教育プログラムとして学習成果を把握・改善する観点（教学マネジメント）からの検討も視野に入ってくると考えられる。

<文献>

- ・五島謙司他 2017 「学生の履修科目選択に関する調査 ―自律的学習者の育成をめざして―」第23回大学教育研究フォーラム
- ・五島謙司他 2019 「学生の履修登録の実態 - 履修科目選択に関するアンケート調査から -」未来のマナビフェス
- ・ディール・H. シャンク, バリー・J. ジーマーマン(編) 塚野州一編訳 2007 『自己調整学習の実践』北大路書房
- ・五島謙司他 2020 「自律的学習に資する履修計画支援プログラムの検証」大学教育学会第42回大会
- ・中東雅樹 2023 「履修計画支援プログラムを通じた大学生の変化に関する検証」第29回大学教育研究フォーラム

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 五島謙司
2. 発表標題 履修支援をめぐる動向と履修登録の現状等
3. 学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 五島謙司
2. 発表標題 履修計画支援プログラムの構想と実践
3. 学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中東雅樹
2. 発表標題 履修計画支援プログラムを通じた大学生の変化に関する検証
3. 学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 美馬秀樹
2. 発表標題 履修計画支援に関わるツールの現状及び活用可能性
3. 学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 五島謙司, 中東雅樹
2. 発表標題 学生の学習行動に関する追跡調査 履修計画支援プログラム受講による学生の学習の変化
3. 学会等名 第28回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五島謙司, 中東雅樹
2. 発表標題 自律的学習に資する履修計画支援プログラムの検証
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 五島謙司, 中東雅樹
2. 発表標題 学生の履修登録の実態 - 履修科目選択に関するアンケート調査から -
3. 学会等名 未来のマナビフェス2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津田純子
2. 発表標題 学習科学をめぐるドイツ教育学・教育科学分野での論議 Bildungswissenschaftenの概念はなぜ成功したのか
3. 学会等名 日本教育学会第78回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 五島謙司, 中東雅樹
2. 発表標題 主体的な学修計画づくりをサポートする支援プログラム
3. 学会等名 第25回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 五島謙司
2. 発表標題 学修計画づくりを支援する履修支援プログラムの開発 自律的な学修サイクルの確立をめざして
3. 学会等名 初年次教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 馬場一貴, 小山田耕二, 美馬秀樹
2. 発表標題 文書クラスタへの自動ラベリング結果の妥当性検証と可視化
3. 学会等名 可視化情報シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 増田勝也, 美馬秀樹
2. 発表標題 講義の自動分類を用いたカリキュラムの国際比較
3. 学会等名 可視化情報シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 津田純子
2. 発表標題 新しい学力論のもとでの「一般教育」にする論議 日独の比較
3. 学会等名 大学教育学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 津田純子
2. 発表標題 コンピテンス志向の教員養成改革とコンピテンス論議 - オーストリアEPIKを中心として
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 津田純子
2. 発表標題 ドイツ語圏におけるコンピテンス概念研究の歴史的展開 今日のエド育科学分野で中心概念に昇格した経緯
3. 学会等名 名古屋大学教育史研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山田容子, 津田純子
2. 発表標題 自律的学习への転換を図る教授法の検討ードイツ語授業での試みを通してー
3. 学会等名 第24回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 美馬秀樹
2. 発表標題 オープンイノベーションによるグローバル展開の課題
3. 学会等名 研究産業・産業技術振興協会(JRIA)活動成果報告会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 崔銀姫, 美馬秀樹
2. 発表標題 「表象の文脈化」に何ができるか 韓国公共放送の「8・15」ドキュメンタリーと「歴史認識」の分析から
3. 学会等名 日本マスコミュニケーション学会新潟大会ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 美馬秀樹
2. 発表標題 人工知能とバイオ関連産業の未来
3. 学会等名 第31回JBDAバイオベンチャーフォーラム(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 美馬秀樹
2. 発表標題 今後の課題について: 調査から見えてきたこと
3. 学会等名 東京大学DNP寄付講座課題提起フォーラム(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 美馬秀樹
2. 発表標題 シラバスシステム構築の共通技術「MIMAサーチ」とシラバスの活用-履修選択支援からカリキュラムの国際比較まで-
3. 学会等名 日本工学教育協会2017年度年次大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 美馬秀樹
2. 発表標題 近代文献のデジタルアーカイブ化と研究・教育での活用 岩波書店『思想』を題材に
3. 学会等名 国立国語研究所 言語資源活用ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 五島謙司，津田純子，美馬秀樹
2. 発表標題 学生の履修科目選択に関する調査 自律的学習者の育成をめざして
3. 学会等名 第23回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	中東 雅樹 (NAKAHIGASHI Masaki) (30406714)	新潟大学・人文社会科学系・准教授 (13101)	追加：2018年9月10日

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	津田 純子 (TSUDA Sumiko) (90345520)	新潟大学・教育・学生支援機構・名誉教授 (13101)	削除：2018年9月10日
研究分担者	美馬 秀樹 (MIMA Hideki) (30359658)	九州大学・教育改革推進本部・特任教授 (17102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	津田 純子 (TSUDA Sumiko)		2018年9月10日～

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関